

令和7年度

広島市平和記念式典訪問団 レポート集



令和7年8月6日 長野県 駒ヶ根市

目次

「当たり前の幸せを広島から世界に」	赤穂中学校 3年	北原	里桜
「戦争の正しい事実を学んで」	赤穂中学校 3年	中城	大登
「私が受け取った平和への声」	赤穂中学校 3年	奥村	果凛
「平和への考え方」	赤穂中学校 3年	杉山	絢美
「広島に行ってきた」	東中学校 3年	飯島	理世
「生きている幸せ」	東中学校 3年	下島	瑚雪



令和7年度広島市平和記念式典訪問団の皆さん

「当たり前前の幸せを広島から世界に」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3年 北原 里桜

あなたにとって「幸せ」とは何ですか。少し考えてみてください。「幸せ」とは、一緒に笑い合える仲間がいて、支えてくれる家族がいて、「ただいま」と言うと「おかえり」と温かい返事が返ってくる家があることだと私は考えます。当たり前のことだと思うかもしれませんが。私自身も平和記念式典や平和記念資料館に行く前は当たり前のことだと思っていました。きっと、80年前の人々もそう思っていたのではないのでしょうか。一発の原子爆弾が落とされるまでは。

今から80年前の1945年8月6日午前8時15分。広島に原子爆弾が投下されました。一瞬にして街は破壊され、多くの人々が何が起こったのかもわからないまま命を奪われました。命を奪われた人々は何かの罪を犯したのでしょうか。家族や仲間と楽しく毎日を懸命に生きていただけなのに、その多くの尊い命が奪われました。

平和記念資料館で現実とは思えないものをたくさん見てきました。ボロボロの服、バラバラの自転車、全身にやけどを負って誰なのかわからない人々の写真。そこはもう、地獄としか言いようがありませんでした。ただいまと言える家も、おかえりと返してくれる家族も、昨日まで笑い合っていた仲間も、すべて失った人も大勢いたでしょう。たった一発で多くの人々の「明日」を真っ暗にしたのです。

「いつか訪れる被爆者のいない世界。」という言葉で始まった子供代表の平和への誓い。この一言が私の考えに新たな気づきを与えてくれました。被爆者は今でも消えない心の傷を抱えながらも、戦争の悲惨さを私たちに伝えてくれています。しかし、それは永遠ではありません。だからこそ、今を生きる私たちがあの悲劇を知り、次の世代に伝え、被爆者の思いをいつまでも語り継いでいく必要があります。そうした私たちの行動が平和につながっていくのではないのでしょうか。

今の日本は幸せです。しかし、世界はそうでしょうか。今もどこかで戦争が起きており、大切な人を、大切な場所を失っている人々がいます。核兵器の保有にはどんな意味があるのでしょうか。尊い命を奪う力にどんな価値があるのでしょうか。命より大切に尊いものがこの世界にはあるのでしょうか。多くの尊い命を奪う恐ろしい核兵器を作ったのが人間なら、それをなくすことができるのも人間です。だからこそ、私は世界に問いかけたいのです。

「戦争の正しい事実を学んで」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3年 中城 大登

忘れてはならない1945年8月6日、広島に1発の原爆が落とされ多くの命が失われました。そして犠牲者の方々に追悼の意を込めて我々は広島平和記念式典訪問団として式典に参加してきました。

式典への参加中、自分は見たこともなければ感じたこともない当時の様子を想像していました。前に出て挨拶をする方々からは立て続けに核爆弾に対する、戦争に対する反対的な意見がいくつも挙げられていました。あの時の広島がどんなに悲惨な状況だったのか、当時を生きていた人々が何を思っていたのか。考えるだけでも胸が苦しくなりました。けれど目を背けてはならないその事実を自分はしっかりと受け止め真剣な気持ちで式に臨みました。

平和への誓いを語った小学6年生の二人。彼らの口から発せられた数々の訴え、誓いはどれも印象的なものでした。そのうちの一つ「ワンボイス」の一言には誰もが心を動かされたと思います。誰かの一言がやがて世界中の人の心をつなぎ、平和へと近づく一歩になる。自分たちのような戦争を経験したことない人たちがこうして式典に参加し思いを深めることができるのは、今までの人たちの「ワンボイス」があったからだと思います。ならば今度はその声を受け取った我々が人に伝える役割を担い後世に語り継がなければなりません。この一言が二言、三言へととなりやがては今を生きる人々の数だけの声が集まるのです。そうした時世界から戦争はなくなり、永遠の平和が生まれるのです。

今はまだ成すことができない永遠の平和もやがては訪れることを願い、式典に参加してきた我々はこの話を語り継いでいきます。

式典に参加した後、広島平和記念資料館に行きました。

そこには被爆者の方の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料などが展示されており、広島市の被爆前後の歩みや核爆弾が投下された時代の状況などについて知ることができました。8時15分で止まった時計、焼け焦がれた学生服、全身に火傷を負い皮膚がただれてしまった人の写真、どれも非人道的な行動を訴えるものばかりで見学中の自分はその数々の資料を目の前にして声の一つも発することができませんでした。

思わず目を背けたくなる事実、だが決して見て見ぬふりをしてはならない悲惨な出来事、戦争の正しい事実を知り、学びの一つとして考えを深めることができました。自分はこの学びを様々な人に伝え、人として歩むべき道の先導者として日本中、世界中に発信していきたいです。

「私が受け取った平和への声」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3年 奥村 果凜

「One Voice」広島平和式典でこども代表が言っていた言葉です。被爆者の方々の思い、被爆遺品から伝わってくる声、そして私たちから繋げていく声。この3つの声を広島記念式典、広島平和記念資料館に行き、繋げていくことが大切だと思いました。

1945年8月6日午前8時15分、一発の原子爆弾が広島市の街の600メートル上空でさく裂し、今まで当たり前で過ごしていた日々が一瞬にして消え去りました。あの日から1945年末までにおよそ14万もの尊い命が失われました。爆風によって建物がなくなり、いたる所から黒煙が上がっている街。全身の大やけどの痛みで苦しんでいる人。骨が残らず、遺品だけが見つかった人。広島平和記念資料館にはそんな写真、絵、そして実物がたくさんありました。思わず目を背けてしまいたくなるものばかりでした。生き残った人々はどんな思いでシャッターを切ったのか、絵を描いたのか考えるだけで胸が痛みました。

遺品からも原爆の残酷さが伝わってきました。Yシャツと書いてあるけど、Yシャツのように見えない服。黒焦げになったお弁当。放射能を帯びた黒い雨のしみが取れないセーラー服。もちろん原爆ドームもそうです。爆心地の近くだったのにもかかわらず、奇跡的に倒壊せず今も保存されています。当時は原爆ドームを見ると戦争や原爆のことを思い出して悲しくなるから取り壊してほしいという意見もあったけど、あの日からずっと変わらないまま残されています。この悲劇を二度と繰り返してはいけないという強い決意を感じました。今まで残してきてくれた被爆者の方々の思いを次の世代に自分たちの言葉で繋げていかなくてはならないと思いました。

原子爆弾は生き残った人々の体にも、心にも傷を負わせました。一番印象に、残ったのは、「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子さんの出来事です。二歳の時に被爆した禎子さんは10年後に白血病で亡くなってしまいます。千羽鶴へのお願いもむなしく、中学校に通うことができませんでした。今、私たちは当たり前のように学校に行き、勉強をしたり、学校行事をしたり、たくさんの思い出を作っています。貞子さんは一発の原子爆弾で将来を失ってしまったのです。また、原爆による被害で苦しみ、自分で自分の人生に終止符を打とうとしていた人の展示もありました。原爆は人々の体も、心も蝕んでしまう。そんな本でしか読んだことがないことが現実でも起こっていたことに驚き、悲しいという気持ちだけでは表すことのできない感情が沸き起こりました。

世界では今も戦争が起きています。中には、核兵器を使った威嚇をしている国同士もあります。これ以上、広島、長崎のような被爆地を作らないように、訴えていくことが私たち現代を生きる者の使命だと思います。

いつか、被爆者のいない世界になっていきます。戦争、原爆の体験は必要ありません。ですが、詳しく、正しく知り、考え、自分の言葉で伝えていくことが大切だと思います。

私はこの機会に原爆についてたくさんを知ることができました。インプットしたことを自分の言葉で伝えて、誰にでも自分事として考えてもらいたいです。これから先の未来でこのような悲惨な出来事が二度と起こらないよう、考え続けていきましょう。

平和記念式典の様子



「平和への考え方」

駒ヶ根市立赤穂中学校 3年 杉山 絢美

80年前広島で何が起こったのか、私はこれまで知っているつもりでした。しかし広島に行って、今までの知識を覆す光景を目の当たりにしました。

私が一番原爆の恐ろしさについて実感したのは、平和記念資料館の展示物です。展示物はテレビやネットで少し見たことがありましたが、実際に見てみると言葉では言い表せない感情になりました。

原爆の恐ろしさは理解しているつもりでしたが、写真や絵、遺品を見ると、それまで持っていた知識を覆す、原爆の恐ろしさを肌で感じました。特に印象に残っているのは、被爆者の方々の遺品です。被爆者の方々が着ていた服や、中身が焦げたお弁当など、当時の悲惨さを感じられ、フィクションではない現実の出来事だと改めて思い知らされました。それらの遺品を通して被爆者一人一人の人生や心情が伝わってくるように感じました。

そして平和記念式典では平和へのあり方について学ぶことができました。特に広島県知事の話について、印象に残っているものがあります。「国守りて山河なし」概念として国は守るが国土も国民も復興不可能な結末、という意味だそうです。広島県知事は、核による抑止は必要なのか、核が起こすものとは何かを訴えていました。核による抑止とは、核を保有することで相手国が攻められないようにするのが目的ですが、いざ、核を使うこともできてしまうため、核戦争になれば日本だけではなく世界が破滅の危機にさらされてしまいます。核は悲惨な結末しか生まない。良いことは何も残らず、ただ苦しみと悲劇しか残らない。核による悲劇をもう二度と起こさせないためには核廃絶を訴えていかなければいけないと思いました。

他に原爆ドームを見学し、核による被害がそのまま残っている原爆ドームは、80年前原爆が落とされた日から時間が止まっているようで、その当時の映し出されているようでした。

被爆者の平均年齢は86歳を超え、80年前の惨状を知る人々は少なくなってきて、原爆の話をも直接聞くことも少なくなってきました。この悲劇を二度と繰り返さないためには私たちが語り継いでいかなければならない。戦後に生まれてきた私たちの使命だと思いました。この広島派遣平和事業に参加し、教科書や授業では習えない、感じられないようなことをたくさん体験できました。これからの平和学習に活かしていきたいです。

「広島に行ってきた」

駒ヶ根市立東中学校 3年 飯島 理世

私は、8月6日に行われた広島での平和記念式典に参加させていただきました。

参加してはじめて思ったことは、広島に投下された原爆によって引き起こされた悲劇は想像を超えるほどひどく、決して忘れてはならない出来事だったという事です。日本だけではなく、世界から人が集まり、テレビでよく見かける岸田さんや、内閣総理大臣の石破さんなどの、たくさんの有名人がいました。広島に落とされた原爆は、世界中に衝撃を与えた出来事だったと改めて感じさせられました。

式典で毎年行われている「平和の誓い」。私はテレビで一度見たことがあるだけでしたが、地元の小学生が強く語っている姿に圧倒されました。「いつかはおとずれる被爆者のいない世界」「OneVoice」今でも私の耳に残っています。

私なりの解釈では、「OneVoive」とは、「たとえ一人の声でも正しい事実を語り継いでいけば、この出来事が忘れ去られることはない」という意味が込められていると思います。これから私たちがやらなければならない使命が強く宣言されていました。

式典の後に訪れた平和記念資料館では入り口から衝撃的な写真や、被爆直後の広島の様子が展示されていました。式典に向かっている途中、広島市の広い道路や大きな建物を見ていると、タクシーの運転手の方が教えてくれた話が印象的でした。「道路を挟んでいる建物から建物間の距離は100メートルほどあるけど、これは原爆ですべてが焼け野原になってしまったからできた町並みなんですよ」と。その道路は「平和通り」と呼ばれ、とても広く、長く続いていました。この道路を見て、少しだけ原爆の破壊の規模を知ることができました。

資料館で見た写真や言葉も強く私の頭に残っています。こどもに「目を開けて、目を開けて」と半狂乱になって言う母親。熱で肌が焼けただけ、今にも顔から落ちそうな目。溶けて一目では何かわからない仏像。後遺症で髪の毛がすべて抜け落ちてしまった姉妹の写真。どれも、今の私たちが暮らす現代社会とはかけ離れた、信じがたい光景でした。教科書では数ページでしか語られない内容が、そこでは圧倒的な量とリアルさで展示されていました。これらを見て、あまりにも衝撃的で現実にあった出来事だったとはとても思えませんでした。それでも私は、今こうして平和に暮らせていることがどれだけ幸せなのか、どれだけ感謝すべきことかを強く感じるすることができました。

被爆してから80年。いつかは訪れてしまう「被爆者のいない世界」私たちが同じ過ちを繰り返さないためにできる努は、80年前に広島で起こった悲惨な出来事を、正しく後世に伝えることです。私はこの貴重な体験を大切に、もし子供ができたときなどに正しく伝えたいと思います。

「生きている幸せ」

駒ヶ根市立東中学校 3年 下島 瑚雪

私が広島の式典に参加したいと思ったのは自分はどれだけ戦争のことを知っていて、知っている内のどれだけが事実なのか、確かめるためでした。正直、広島に行くのに抵抗もありました。見るだけでも辛い事がわかっていましたからです。しかし、私は二度と爆弾を落とされたくない、人がたくさん亡くなってしまう事はやめてほしいと思い、参加しました。

式典中はやはりとても暑かったです。水がないと倒れてしまう。そう思い水を飲みました。私は、はっとしました。水を飲みたい時に飲める事、それは私にとってすごく当たり前でした。ですが、80年前、この広島の地、自分が今座っている場所では、水がほしくても無くて飲めない。そういった人がたくさんいたんだと改めて思いました。

私が式典中に一番印象に残っているのは、広島の小学6年生が言っていた「人類初」という言葉です。その事は前から知っていたのですが、何回聞いてもどうして広島だったのかとってしまいます。原爆なのだから爆発したら人が死んでしまうということは想像がつかはずです。しかし、原爆を落とすことは正しいという人もいます。多様性を認める時代になり、どちらが正しいとは言えませんが、人が傷つくような間違っただけの選択はしてはいけないと思えました。

資料館にも行きました。そこには想像できなかつた辛く苦しい記憶が残されていました。自分と同じくらいの年の子ども、溶けて原形が亡くなってしまった人、放射線の影響で体に害が出てしまった人たちなどの写真がありました。思っていたとおり、見てだけで辛く、苦しかったです。写真に写っている人は今までどおりの生活を見たことも聞いたこともない爆弾でこわされてしまったということを改めて思い知らされました。そして、未だに血が残っている服を見たときが一番衝撃に駆られました。当時その服を着ていた人は、どんなに絶望したのだろうか。そう考えるだけでその場にいる事さえだんだんと辛くなりました。それと共に、この80年前の思い出したくもないはずの記憶を残してくださった被爆者の方に感謝をしなければという思いになり、それを私たちは繋いでいかなければならないという思いが強くなりました。

自分と同じ人の手で爆弾や核兵器が造れてしまうことに恐怖と不安を感じます。ですが、こんなにも多くの方が辛く苦しい思いをし、犠牲になっているということを知った今、その思いを無駄にしないように伝えていこうと思えました。そして、私たちが一番にできる事は、原爆の事や戦争の事を知ろうとすることだと思います。今自分が生きていられるのは幸せだということ、自分が普段やっているあたりまえは幸せだということを忘れずに生きて行こうと思えます。

平和への誓い

いつかはおとずれる、被爆者のいない世界。
同じ過ちを繰り返さないために、多くの方が事実を知る必要があります。

原子爆弾が投下されたあの日のことを、思い浮かべたことはありますか。
昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分。
この広島に人類初の原子爆弾が投下され、一瞬にして当たり前の日常が消えました。
誰なのか分からないくらい皮膚がただれた人々。
涙とともに止まらない、絶望の声。
一発の原子爆弾は、多くの命を奪い、人々の人生を変えたのです。

被爆から80年が経つ今、
本当は辛くて、思い出したくない記憶を伝えてくださる被爆者の方々から、
直接話を聞く機会は少なくなっています。
どんなに時が流れても、あの悲劇を風化させず、
記録として被爆者の声を次の世代へ語り継いでいく使命が、私たちにはあります。

世界では、今もどこかで戦争が起きています。
大切な人を失い、生きることに絶望している人々がたくさんいます。

その事実を自分のこととして考え、平和について関心をもつこと。
多様性を認め、相手のことを理解しようとする事。
一人一人が相手の考えに寄り添い、思いやりの心で話し合うことができれば、
傷つき、悲しい思いをする人がいなくなるはずで、
周りの人たちのために、ほんの少し行動することが、
いずれ世界の平和につながるのではないのでしょうか。

One voice.

たとえ一つの声でも、学んだ事実思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはずで、
大人だけでなく、こどもである私たちも平和のために行動することができます。
あの日の出来事を、ヒロシマの歴史を、二度と繰り返さないために、
私たちが、被爆者の方々の思いを語り継ぎ、一人一人の声を紡ぎながら、平和を創り上げていきます。

令和7年（2025年）8月6日

こども代表

広島市立皆実小学校 6年 関口千恵璃

広島市立祇園小学校 6年 佐々木 駿

広島市平和記念式典訪問団レポート

発行 令和8年2月

企画編集 駒ヶ根市 総務部 総務課

長野県駒ヶ根市赤須町20番1号

電話 0265-83-2111(代表)